

【日本大学】

高校生を対象とした 建築設計競技

佐藤 慎也 ● 日本大学理工学部建築学科教授

1 これまでの64年

日本大学では、理工学部、生産工学部、工学部、短期大学の共同主催により「日本大学全国高等学校・設計競技」を開催しており、2017年は64回目を迎える。

これは、高校教育の一助となることを目的として、高校生を対象に「住宅」の設計提案を求めるものであり、指導に当たられる高校の先生方の熱意もあって、毎年、約50校から150点ほどの応募がある。公開審査会において、優秀作品の作者である高校生6名によるプレゼンテーションが行われ、最優秀作品1点を決定している。

第1回は1953年、日本大学工業高等学校（現・日本大学習志野高等学校）が主催し、工学部（現・理工学部）が共催という体制（第21回から理工学部主催）で、

やはり「住宅」をテーマに始まった。当初は「全国工業高等学校設計競技」の名称で、工業高校建築科の生徒のみを対象としていたが、普通高校をはじめとする幅広い応募を期待して、第47回（2000年）に現在の名称に変更した。

2 建築設計競技の甲子園

当初、テーマは「市庁舎」「図書館」「公民館」といった難易度の高いものが選ばれていたが、第32回（1985年）からは、高校生にとって身近な「住宅」に限定している。これまでで最も応募数が多かったのは第49回（2002年）の267点であり、テーマは「私のライフスタイル、私のすまい」。高校生が等身大で提案を行うことのできる内容であった。

応募締切を毎年8月末と設定しているために、多くの高校では、クラブ活動の一環として、生徒と教員が一体となって夏休みを費やして作業を行っている。表彰式では、入選を果たした高校生自身と所属高校を表彰するとともに、審査員と高校生だけでなく、高校生同士や高校教員同士の交流が生み出されている。中には、常

に入賞を果たす高校もあり、そんな常連校同士の教員の悲喜こもごもなやり取りが聞かれることもある。さらに、かつて入賞を果たした高校生が、今度は教員となり、教え子とともに表彰式に現れるといったうれしい再会もあった。こうして、今では「建築設計競技の甲子園」と呼ばれることもあるものに成長した。

3 審査の多様な視点

審査員は日本大学の建築系教員が務めており、デザインだけに特化した審査を避けるため、意匠、構造、環境、都市計画、歴史など、多様な分野を専門とする教員が集まることによって、複合的な視点による審査を行っている。さらに、日本大学が多様な学部を擁するために、主催である建築系学科を持つ工学系の4学部（中には、海洋建築工学科やまちづくり工学科といった特色のある学科も含む）だけでなく、生物資源学部や藝術学部の教員も審査に加わることによって、より幅の広い視点を持たせている。また、第52回（2005年）からは、学外から建築家や建築計画者などを審査員長に迎え、テーマを共同で設定するなど、学内だけに留まらない視点にも配慮している。

4 これからの希望

第63回のテーマは、「子どもを育む家」。最優秀賞を受賞したのは、昼は働きながら、夜間の定時制高校に通う生徒の作品だった。その提案は、高齢化が進むニュータウンにおいて、

増加した空き家を減築し、さらに道路を廃止して子どものための広場をつくり出すもので、全ての住戸の1階を広場へ向けて

開放できるように改修している。このように、高校生であっても、というよりも高校生であるからこそ、現代的な社会的課題に正面からぶつかり、素直な解答を示すことができたのである。こんな作品を生み出す高校生が現れることが、高校教育の一助や日本大学の教育という枠を超えて、建築界の未来につながる希望となることを期待し、今後もこの設計競技を続けていきたい。



【専修大学】

教育改革の切り口

— 専大ベンチャービジネスコンテスト

池本 正純 ● 専修大学名誉教授

1 経緯

「専大ベンチャービジネスコンテスト」は、もともと学生部主催のイベントとして始まった。2002年のことである。当時、学生部長であった私が、2人の学生から「ベンチャービジネスを教えてほしい」と要求され、悩んだ末、それに応える一つの方法として考えたものである。元気のいい学生が活躍できる場をまず作ろうという発想である。優勝者に授与する賞は「シリコンバレー五日間の旅」とし、ポスターには「シリコンバレーを目指せ」とうたった。

もう一つは「ベンチャー入門講座」である。ベンチャー経営者を10人ほど招き、体験に基づくお話をしてもらうという趣向である。学生のアイデアをただ募集するだ

けでなく、ベンチャーってどんなものなのか、起業家ってどんな人なのか、具体的な話を聴かせてベンチャーに関心を持たせようと考えた。コンテストの審査員にもベンチャー経営者たちに協力を仰いだ。おかげで、発表する学生のモチベーションも上がった。

当初は、元気のいい2人の学生の要求にいかに応えるかということからスタートしたのだが、ベンチャーに関心を持つ学生は意外にいるということに気付かされた。しかも、勇気付けられたのは、このプログラムに外部の方々、特にビジネス界の方々が関心を持ち、高く評価してくださったことである。その後、外部とのさまざまな連携の話が出てきた。協力してくださるベンチャー経営者の層も広がり、特に本学卒業生の経営者の存在はありがたかった。現在も、「教育の産学連携」を深める努力を継続中である。

2 キャリア教育へのつながり

このコンテストを創設したことの最も大きな意義は、本学のキャリア教育の起点になったということである。何よりも、企画し運営してきた私自身が「自分がやって



発表の様子

いることはキャリア教育なのだ」と気付かされた。その後、機会あるごとに学内でキャリアセンターの設立を訴えた。紆余曲折はあったが、2005年にキャリアデザインセンターが設立され、私が初代センター長に就任した。

世紀の変わり目の頃からキャリア教育の必要性がまきびすしく言われるようになったのには、理由がある。バブル崩壊後、日本経済の閉塞状況の中で就職環境が悪化し、就職率が落ちたことが教育関係者の危機感を誘った。

しかし、私はそれ以上に、日本経済の産業構造が大きく変化する中で、それまでの高度成長時代に適合的であった教育のあり方が根本的に問い直されようとしている点を指摘したい。「偏差値の高い

大学に入りさえすれば、大企業に就職できる。だから受験勉強に励め！」というのが、これまでの教育であった。大学は、偏差値の輪切りの受け皿に過ぎなかった。大学の勉強に関係なく、18歳時点でキャリアの勝ち組負け組が決まるという価値観である。い

ま、こうしたキャリア上の価値観が根本的に改革を迫られている。新しいものを作り出そうという志が日本社会に欠落している。キャリア教育を切り口に、日本の教育改革を進めなければならない。実は、2人の学生は既存の教育に飽き足りないものを感じていた。それがベンチャーへの関心として噴き出したのだと分かった。

3 ベンチャーコンテストで目指すもの

受験勉強や座学で身に付く能力は、①情報収集力、②論理的思考力、③プレゼン能力といったものである。それらは、正解があらかじめ用意され、教科書が存在する世界で身に付く能力である。実際の社会で問われる能力には、さらに深いものがある。それが、④問題発見解決力、⑤決断力、⑥人間関係構築力であり、これらの力の核になるのが志である。ベンチャーに目を向けることは、世の中の仕事の多様性に気付き、そして何よりも、自分らしい仕事がしたいという志を育むのである。それは、正解のない実践的な課題にぶつかの中で鍛えられる。ベンチャーコンテストは、決して学生起業家を輩出することが目的ではない。どんな企業で仕事をしようが、最後に問われるのは創造力なのである。

〔東洋大学〕

30年続く「現代学生百人一首」

— 東洋大学主催の累計応募数134万首の短歌コンテスト —

榊原 康貴 ● 東洋大学総務部広報課課長

はじめに

「現代学生百人一首」は、東洋大学が創立100周年を迎えた1987年の周年事業の一環として企画された短歌コンテストである。

100周年ということで、100の数字に因んだ企画として、当時学長で歌人の神作光一先生が創設し、スタートした取り組みだ。1987年から実に30年続くこのコンテストは、毎年のお応募数が5万首を超え、累計応募数は約134万首にのぼる。この応募数は短歌コンテストとしては、日本最大規模といっていいただろう。大変ありがたいことに、世代を越えたファンの方から毎年の発表を心待ちにしているという応援の声を多数いただいている。

1 ものの見方・生活感覚

この「現代学生百人一首」の特徴は、短歌に詠み込まれる瑞々しい学生・生徒の「ものの見方・生活感覚」にある。「もの見方」とは、本学が掲げる建学の理念「諸学の基礎は哲学にあり」に通じている。

作品の題材は多彩だ。淡い恋の歌、大きな災害、事件・事故の悲惨さ。友人や家族の関わりなど身近で普遍的な話題。その年に流行したモノ・人物なども表現されている。人々は若者たちが創作したバラエティー豊かな短歌から、世相を感じ、時代の移り変わりの中に息づく「若者の感性」に触れることができるのだ。

例えば、若者たちのコミュニケーション手段は劇的に変化している。30年前は、電話（家電）やポケットベルであったが、それがPHSや携帯電話に変化し、今日ではスマートフォン普及によってSNSがコミュニケーションの場と移ろいかわる。

しかし、このように手段やツールが変化しても、「何かを表現したい、何かを伝えたい」という思いは変わらない。こうした学生や生徒の思いこそが「現代学生百人一首」

を30年間支えていただいた原動力であつたと思う。

2 毎年『天声人語』に掲載

毎年選出している短歌作品100首は、朝日新聞の「天声人語」をはじめ、多くのメディアで取り上げられている。

特に「天声人語」では、毎年成人の日（1月の第2月曜日）前後に半ば指定席のように取り上げられ、報道的な価値や社会貢献性が高く評価されていることを物語っている。

2016年度は、まさに30回の節目にあたり、さまざまな記念の取り組みを行った。文部科学省の後援名義申請や東京と大阪で開催した短歌作成指導を目的とした



『東洋大学 現代学生百人一首の30年
——若者の感性で詠んだ森羅万象』
朝日新聞出版、2017

中・高教員向けのセミナー、30年の歴史を振り返るための市販書籍も刊行した。この書籍には先の「天声人語」の記事を全て転載し、その年の大きな出来事とあわせて誌面構成は、

ちようどバブル経済崩壊前後からの日本の文化や世相を振り返ることができ、史料的价值も高いと思われる。

巻頭インタビューでは、日本文学研究の第一人者ドナルド・キーン先生（学校法人東洋大学学術顧問）にご登場いただき、近代の歌人たちのエピソードやご自身の短歌に対する思いを語っていただいた。さらに、グラビアページでは、競技かるたを扱った映画『ちはやふる』の主人公、女優・広瀬すず氏が、若者の代表として登場し、華を添えていただいた。

3 伝統の櫻を継承する

この30回はあくまでも通過点。昨今は、在外教育施設やインターナショナルスクール、東洋大学に在籍する留学生などからの応募も少しずつ増えている。応募の地域も変われば、表現する言語も変わるかもしれない。この「現代学生百人一首」は、そうした変化を柔軟に取り込みながら、さらなる進化が求められることだろう。

今後50回・100回を目指し、若者の感性の発露の場として、また日本語や日本文化の大切さを振り返る機会として、その伝統の櫻を継承していくことの意義と責任を胸に、さらにこの取り組みの普及を目指したい。